

日本財団補助金による

1998年度日中医学協力事業報告書

-学会開催に対する助成-

1999年3月15日

財団法人 日中医学協会

理事長 中島章殿

報告者氏名 北 潔 

所属・役職 東京大学大学院医学系研究科・教授

所在地 〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1

電話 03-3812-2111 内線 3526

講演集・シンポジウム写真等学会に関する資料を添付

学会・学術交流の名称 第9回 国際寄生虫学会

テーマ 21世紀への寄生虫学

主催団体 日本寄生虫学会

代表者 辻 守康

期間・開催地 平成10年(1998) 8月24日～28日・幕張メッセ

参加者数 日本側 670名 中国側 25名

招へい・派遣目的 上記国際学会へ出席し、研究成果を発表する。

1. 招へい・派遣研究者 人数 3 人 記入欄不足の場合は別紙を添付。

氏名	所属・役職	研究分野
Prof. Ming-yi Xia	Professor Institute of Parasitic Diseases Chinese Academy of Preventive Medicine	寄生虫学
Prof. Hong-chang Yuan	Professor School of Public Health Shanghai Medical University	疫学・公衆衛生学
Ass. Prof. Zhan Bin	Associate Professor Institute of Parasitic Diseases Chinese Academy of Preventive Medicine	寄生虫学

滞在期間 自 1998 年 8 月 23 日 至 1998 年 8 月 30 日

第9回国際寄生虫学会

学会テーマ：21世紀への寄生虫学

日本側主催代表者：会長 辻 守康（杏林大学・教授）

中国側代表者：Ming-yi Xia（Institute of Parasitic Diseases, Chinese Academy of Preventive Medicine, 教授）

学会報告

北 潔（東京大学大学院・医学系研究科・教授）

第9回国際寄生虫学会は平成10年8月24日（月）から28日（金）までの5日間、千葉市の幕張メッセにおいて開催されました。開会式には天皇、皇后両陛下のご隣席をいただき、アジアで初めての国際寄生虫学会として参加者総数1270名の極めて内容の充実した国際学会となりました。本大会の開催にあたってはアジア諸国の経済的危機と重なりこれらの国々からの参加者の減少が危ぶまれたにもかかわらず、多数の学会員が参加できたのはひとえに貴協会をはじめとする団体や個人のご援助によるものと心から感謝致しております。本大会は日本学術会議と日本寄生虫学会の共同主催により日本医学会、日本医師会、千葉県、千葉市、日本学術振興会、国際協力事業団、東京都医師会、千葉県医師会、日本衛生動物学会、日本熱帯医学会、日本免疫学会、日本生体防御学会、日本獣医寄生虫学会、および日本臨床寄生虫学会の後援によって開催されました。開会式に始まった大会は基調講演、特別講演、シンポジウム、特別フォーラム、ワークショップ、一般講演（495題）、ポスター発表（414題）から構成され、閉会式をもって終了致しました。今回のテーマである「21世紀に向けての寄生虫学」は今日もなおマラリアや住血吸虫症をはじめとする寄生虫症が途上国で蔓延し、重大な健康問題となっているばかりでなく、これが途上国のバランスのとれた開発と経済発展にとって大きな妨げとなっている現状に対してかけられたものであります。そしてその具体的な対策について討論するとともにワクチンや新しい抗寄生虫薬の開発、また医、薬、農、獣医、理学の各分野にわたる学際領域としての寄生虫学の国際的共同研究の推進について真剣な討議が行われました。

国際寄生虫学会は世界寄生虫学者連盟（World Federation of Parasitologist; WFP）が主催国を指名して4年ごとに開催される国際学会であります。現在57カ国、83団体が加盟している寄生虫学に関する世界で唯一の国際学術団体であります。本学会は1960年にワルシャワで設立され、現在わが国から鈴木 守群馬大学医学部教授が理事長に就任しています。本学会が日本で開催された事は様々な面で大きな意義を持っていますが特にその成果として以下の点があげられると考えられます。

1) 本大会がアジアではじめて開催された事は特に強調すべき点であります。アジアは自然生態系、そしてその中の重要な構成員であるヒトの社会が最も多様性に富む地域であり、世界中で最大の人口を擁していま

す。この様な背景と気候、風土によって多彩な寄生虫疾患がヒトと動物の間に広く蔓延しており、これらの解決がアフリカ地域とともに最も重要な課題となっております。しかしこれまでにアジア地域での開催は一度も行われておらず、日本での本大会の開催は大きな意義があったと思われま

2) 21世紀に向けての寄生虫症対策を考える上でますます多様化してきた寄生虫症に関して、現状を把握しその動向と将来について極めて活発な討議が行われました。医学の研究が進み、駆虫剤、殺虫剤、消毒剤、抗生物質などにより感染症に対する対策が進み、また衛生教育によって人々の間に知識が普及し公衆衛生の施策も進み先進国では感染症の問題はともすれば比重の軽いものと考えられています。しかし開発途上国においては特に寄生虫症に関しては年間300万人の死者を数えるマラリアをはじめとして多くの人々を苦しめています。カイチュウ、鉤虫、鞭虫などの土壌媒介腸管寄生虫の感染者も世界的に何億人の単位で発生しています。さらに先進国においても先天的あるいは免疫抑制剤の投与なども含めた後天的な免疫不全に基づく寄生虫による日和見感染が重大な問題となってきております。この様な寄生虫症にはまだ有効な化学療法剤のないものも多く、さらにマラリアで顕著な様に薬剤耐性原虫や薬剤耐性ベクターの出現が対策をますます困難にしております。この様な状況を克服するためにはフィールド、実験室を問わずこれまでの経験を活かし、さらに新しい知識と手法を取り入れた対策と研究が必須であります。この様な観点から基調講演のテーマとして「21世紀に向けての寄生虫学のとるべき姿」「21世紀における感染症と寄生虫症の防圧に向けてのWHOの目標」がとりあげられた点は非常に意義深い事でありました。

3) もうひとつの成果として、国内においてほとんどの寄生虫症の制圧あるいは根絶に成功したわが国の寄生虫症対策そして寄生虫学の進展に対する積極的な姿勢を海外の諸国に伝える事ができた点があげられます。トルコでの前回の会議において本大会をわが国で開催する様にとの指名が行われた事は諸外国のわが国に対する要請と期待の現れと考えられますが、実際にこれに応えるべき努力も今後必要であります。予想以上に多くの大学院生や学部学生が参加した点はわが国の寄生虫学の発展に大いに心強い事実であります。わが国が世界の寄生虫症対策に貢献すべきとのいわゆる「橋本イニシャチブ」が実際に動き始めた事にも少なからず影響があったと思います。この様に科学先進国としての役割を自覚する大変に良い機会であったと考えられます。

以上の様に大きな成果をあげた国際会議でしたがこれを踏まえ、さらに地球規模での寄生虫対策と現代の要請に応えられる先端的な寄生虫学研究を進めて行く必要があります。この中でわれわれ日本の寄生虫学者の果たすべき役割はますます大きいものとなると考えられます。特に若手研究者の育成は最も重要な課題であり真剣に取り組むべき問題であります。この点でボランティアも含め大会会場に多くの学部学生など若い力の新たな息吹が感じられた事は特筆に値する事でありました。

最後にこの大会の開催に当って中国から3名の第一線の研究者の参加を助成下さいました日中医学協会の皆様にあつくお礼申し上げます。





